

私の悪口について（新しき世界へ 1972 年 9 月号）

Georges Ohsawa

桜沢如一

私が CI 生や MI 出身者をボロクソに公開の席や誌上でやっつけるコトは大へん悪い。ゴカイを招く。オソレをもたせる。ゼヒあれだけは止めよ、と云う忠告を親身な人からヨクきく。アリガタイことである。

MI の子らの悪口をかくことは実際ワルイ。かくのもツライ。第一ソレはゴカイを招く。不快をバラマク。何よりも損だ。

昔、MI でヨク“悪口コンクール”を開いた。（ダレカー人をマナイタにのせ、ミンナで悪口投票をする。最高級の悪口を考えた人に GrandPrix(賞)(注 1)がでる。

ここで悪口の定義が必要である。我々の間の悪口は創造的である。“最大の欠点をエグリ出し、ソレを最大の美点にする方法をユーモアたっぷり、オモシロおかしく、楽しく暗示し、本人に終生忘るべからざる反省と印象を与え、たえず自発的に向上せしめるコトバ。”

フツウの悪口は陰放送である。悪口のための悪口で、ナンノ創造も生産もない。時間つぶしである。

タクサン、『コンパ』に出ている例の中で、最も忘れられないケッ作は「よらば斬るゾ」と云うのだ。ある大学の数学の先生、謹厳そのモノだが、ドーニモ冷たい数学のような感じの言行の人だった。この悪口のオカゲでカレはその後全く人が変わった。

先日、『マ周湖』（注 2）の特別悪口コンクールでは C がヤリ玉に上げられた。その中でケッ作は

「カワイイ、カワイイ人だがニクラシイ」

「カワイイ、カワイイ人だがオソロシイ人」

彼女のために苦しめられた人は私を筆頭に何十人もある。結婚生活も破れた。ソレデモ本人には、この（オソロシイ）と云うイミがまだ分らない。

ソレモ、彼女のタメにおそろしい目に会った人で、彼女にソレを面と向かってせめた人がないから。親、姉弟、親セキにもモテあまされている。

×

悪口を面と向って云うコトは実に六カシイ。自分の子に向っても（大人になると）六カシイ。大人になってマダ悪口や忠告をうけるのは、たいてい手おくれである。しかし、私はソレを直してやりたい！と云う切ないオセンチ病がある。恨まれても、憎まれても、仕返しされても、他人第三者の不快を招いても！

セメテ名を伏せたら、とも考えたが、それはかえってマズイ。たとえば H とかくと、ハ行の頭文字の人がミナ自分のコトだととる。そして怒る。

スベテの人々の悪評、過失やツミを自分のモノとし、反省に資する人（人のフリ見て吾

がフリ直せ) だけが向上するので、他人の悪評ドコロカ自分に対する悪口にさえ感謝しないようなセマイ度量の人はモーこの世に自由に、幸せに、生きて行く資格、日々より大きなヨロコビにつつまれて行く資格はない人だ、全世界のツミ、悪口、犯罪、悪の根源、病、哀、悲、逆境、不運、不幸を一人で引き受けて、解決を発見したモノでない限り、第七天国の市民ではない、ドレイ地ゴクの市民だ。ソレを救出し、脱出させようと云う私の真意を分ってくれる人は少ない。

×

私の悪口をニクシミの悪口だと思ふ人があるのにはおどろく。ワザワザ悪口のために何千万円の金、数十年の時をかけ、一生ノ命を浪ヒするモノがあるだろうか？

忍びがたきを忍び、たえ難きをこらえて、損をしながら、ウラミやノロイを浴びながら、何回でも愛するモノを忠告し、反省させようと私がするのは、全く第七の愛よりホカ何ものでもない。親しいモノ、私をペールと呼ぶ人には、愛すれば愛するホド私は出来る限り、忠告をする。他人や初対面の人にはゼツタイに云わない。ソレを受けとめられない人、感謝も出来ない人は、去って行くがよい。モー数千人の人が去った。ケレドモ、十年もたつと、たいてい帰ってくる。年がたつとダレでも悪口がナツカシクなるのである。年と共にマコトの忠告が分り出すからである。

×

しかし十年悪口をつづけても、ワニのツラに小用のようなものがある。不幸の甲ラが年と共にあつくなっている。サザエのように貝ガラをマスマスあつくして身を守っている。私のペンの無力さを嘆くよりホカはない。カレラは今に魚屋の店頭にさらされている自分を発見するだろう。イヤシイことだ。

×

私がモットモきつく悪口を浴せたのは、私を弟のように愛してくれた森山シマ姉さんである。ソレニ私はシマ姉さんを見殺しにした。いまだに私はソレノを後悔している。

私が朝から晩までバリ、悪口を浴せるのに、森山さんはヤンチャナ弟を相手するように、ニコニコしていた。大きな姉が、手をフリ廻してナグリ、アバレル小さな弟を上から、手で頭を押して自分から、はなして、短い手をバタバタ空マワリをさせるように。ソコデ私は水鉄砲や豆鉄砲のようなトビ道具—最強の、最大級の悪口を発明して、射ち込んだ。(「蛙のツラに水」を「ワニのツラに小便」に替えたり、「森山さん、アンタと私は、牛とヒコーキをヒモでくくりつけて、旅行さすようなモノだ」とか……)、(一度、森山さんは余りの悪口に、泣き出して、荷物をまとめて出て行ったコトがある。)

ソレデモ、森山先生は私を愛してくれた。大アバレにあばれて、さんざんアタリちらして、私が怒ったフリをして、同じ事務室にしながら、終日モノも云わなかったような或る日の翌朝、大きな、重いマルゼンの紙包が私の朝の机の上ののっていたコトがある。あけて見てオドロイタ。それは **Bio-ecology** の大きな本だった。ほしくって、たまらなかったが、余り高いから買わずに帰った話をその前日にしたのを聞いた森山さんはスグ円タク(注 3)で

走って行って買って来て私のキゲンを治そうとしたのだった。

ーバカだねー、アンタは、こんな高い本を買って来て…と私はまだヘラズロをたたく。

ードーセわにサンですから、何を云われたって平気でしょ、コレはワニさんのオワビ。何しろワニは大きなワニロに一杯分金が入っているンですから…御入用でないなら、紙屑カゴに入れましょ……

×

トニカク森山さんは私の悪口罵倒を四、五年浴びた。私たちはいいコンビだった。それから、私たちは全国はムロン、マン洲まで講演して廻った。

あの勇しい映画「隊長ブーリバ」で、父と息子が再会のヨロコビをもった時、二人でモノ凄い格闘をやるのを見たが、私と森山さん(悪口と親心、姉心)の交りはアンナモノだった。私はホント一二親しい仲ならナグリ合ってお互いを強くし、師弟ならナグリとばされる事によって強くなるのが当然だと、思う。

×

トコロが大ていの方は、悪口を好まない。親ランは、悪口を云われたら、「左こそ候はめと領承候え」と云っている。バカだとか、ウソツキだとか、最大級のバリ、バ倒を浴せられても、ナールホドと受けとって、「この人はソナニ私を見ているのだ。ドーシテそんなに見えるのだろう。大いに反省し、改造し、見直してもらおう……」とアリガタイ忠告としてうけとるのが PU 人の道である。弁解はゼツタイ無用である。まして抗議なぞ！

よし、相手のマチガイであっても！

ナゼナラ、マチガイはやがて分る。(分った時、あ、ヤッバリ私は正しかったのだ。アリガタイことだ、ウレシイことだ、と云うヒソカナよろこびがわく。)

これが平和と自由への唯一の道である。

トコロが西洋は逆で、弁カイと抗議を全身全力をこめてやるのが常道になっている。プロテスタン(抗議者)ナド云う宗教さえある！！しかし私は西洋でも、私の信条で通して来た。そのためズイ分ソンをしたコトもある。この東洋精神が分らないアチラの人々はヨク私を警視庁ナンカに投書した。告訴した医者や医師会もある。

三年前にも、あるバリの大雑誌が「新しき黄禍—G.OHSAWA の出現」と云う大見出しで、写真入りで大きな読み物を発表した。ソレは、西洋人全体に対して呼びかけた大警告であった。最近有名になった桜沢と云う男は、東洋の哲学と医学をかかげて、タクサンの人を引きつけている。モー信仰のマトとして彼を仰いでいる人もあるが、カレは実は恐るべき人物である。カレは世界政府協会の会長で、ワケの分らぬ東洋哲学と、マカフカシギの東洋医学と柔道や合気で、人々を迷わせ、社会を混乱させ世界を転覆させるコトを目的としている…と云った風な大ゲサナ読み物だった。私はオモシロイと思った。しかし弁カイも抗議もしなかった。

×

私に悪口をたたきつけられて(叱られて)、マレニ弁カイしたり、抗議したりする人もある。

しかし最近始めてたった一人だが、一言ごとにマッ赤になって、全身をこわばらせて、私を反撃して来た B と云う青年がある。トテモ純情な、画のすきな、ウソはつかないイイ青年だが、四年もドイツに行っていたのに、通訳をやらせると。恐ろしく大きなマチガイをやる。ソレは日本文を正確によみとらず、逆のイミに訳してしまうので、ツマリ正確性がないのだ。ソレガ単なる不注意や日常の生活の失敗でなく、カレの人生観がソんな正確性のないモノである証明なのだ。その証拠になるオモシロイ話があるが、長い話だから止める。

×

トニカク、悪口をきらう人は孤独な生活をやるのがいい。悪口をアリガたく思う人、叱ってくれる人を探し求める人は幸いなるかな！シャカは初め多くの人々から、石や瓦のカケラを投げつけられた。スルトそれらが金や銀の蓮のハナビラになって地におちた。人々はそれを、我ガチに拾った……

×

悪口(ソレがタダ悪意だけのモノであっても)をしづかな心で、ホホエミさえもって、うけとる人、アリガタクうけとる人…ソんな心持ちは正食の人でない限りトテモもてない…ソレが出来入はモー幸せな人である。

「銀はルツボによりてためされ、人はホメコトバによりてためさる」

と云うコトバがバイブルにある。私は、

「悪口されて、幸せになれる人、マスマス光る人だけが、ホントーノ自由人である。」

と云う。

(「新しき世界へ」 306号 1961・6・1より)

- ・注 1…GrandPrix,グラン・プリ、大賞。
- ・注 2…「摩周湖」、当時、東京銀座にあった正食レストラン。
- ・注 3…円タク、市内1円で走るタクシーのこと。
- ・注 4…「Bio-ecology」、桜沢如一「生命現象と環境」61 ページ参照。